万葉集および勅撰和歌集にみる松の詠まれた立地の変遷

七海絵里香¹⁾・大澤啓志^{*2)}

1) 株式会社 愛植物設計事務所 Ai-Shokubutsu Landscape Planning Office

2) 日本大学生物資源科学部 College of Bioresource Sciences, Nihon University

摘要: 万葉集及び勅撰和歌集において松が詠まれた歌からその生育立地の推定を行い、年代毎の変遷を明らかにした。計 22 集の和歌集には 1,493 歌で松が詠まれており、内 1,147 歌 (77 %) で生育立地の特定が可能であった。生育立地は臨海部が 22~35 % と変動しつつも概ね一定の割合を占めており、中でも海浜のクロマツ林を詠んだものが多かった。本格的な海浜域での造林が始まる以前より、クロマツ林が広く存在し、その植生景観に価値が置かれてきたことが示された。内陸部は年代が下るにつれて割合が増加し、1200 年代以降は浜以上の割合で山の松が詠まれるようになった。これは山に関連する用語の種類の多様化、「名もなき山」や「聴覚としての山の松」の嗜好の広がりによるものと考えられた。

キーワード: 松、和歌集、植生景観、風の音

NANAUMI, Erika and OSAWA Satoshi: **Change of the location composed pine trees in Manyo-syu and anthology of Japanese poetry compiled by imperial command**

Abstract: We inferred that Japan provided a habitat for pine trees from the representative anthology of Japanese poetry written from the 8th to 15th century and threw light on the changes in the habitat occurring every century. People have acknowledged the value of the vegetation-covered landscape characterized by Japanese Black Pine trees on the beaches, because it is always referred to in poetry. In addition, the percentage of the vegetation-covered landscape characterized by Japanese Red Pine trees in the mountains increased rapidly after the 13th century. Association with wind sounds and the diversification of terms alluding to a mountainous habitat were regarded as the reasons.

Key words: pine trees, anthology of Japanese poetry, vegetation landscape, sound of the wind

1. 背景と目的

人は古来より周囲の植生景観やそこに生育する象徴性の高い植物に対し、様々な意味や美意識を見出してきた。このため今後の緑化を考える上では、現在につながっている過去からの緑化文化の内実を検討することは意義あることと考える。何故なら、今日の緑化に対する価値観や美意識も、これまで累積してきた歴史的な緑化文化の基層の上に成り立っているためである。ここに、近代以前の時代ごとの個々の植物に対する当時の人々の意識構造についての研究が指図され、その研究蓄積が求められることとなる。その際、我が国では奈良時代から間欠的に編纂されてきた国を代表する和歌集の存在が特筆され、時代ごとの比較や変遷を考察する有効な研究素材となる¹³⁾。これは例えば万葉集に詠まれた植生景観が、かなり当時の植生に即していたことが指摘される²⁾ためである。すなわち、それらの和歌に詠まれた植物は、その時代に注目された植生景観と捉えることができ、そこに人々の意識構造の時代変遷を読み解く糸口があると考えられる。

そこで本研究では、天皇他皇族の勅により編纂されるという一定の基準を満たしてきた和歌集に着目し、日本人にとっ

て象徴的な植物であるとともに特定の植生景観の指標性が高い「松」について検討した。それは、奈良時代の万葉集を始め、続く平安時代から室町時代にかけて 21 集の勅撰和歌集が編纂されており、この中に詠まれた「松」の立地から時代ごとに注目された植生景観の変遷を把握することはある程度可能と考えられるためである。もちろん、詠み手は単に目の前の情景を歌にしている訳ではなく、通常は自身の感情や運命感を自然やその植物等に重ねて詠んでいる。また、枕詞等で他の歌を引用する形で詠まれる場合も多い。このため、詠まれた歌数の割合が必ずしも当時の植生景観の賦存量と直接的に対応する訳ではない。このような和歌表現という限定された研究素材ではあるものの、それを前提としつつ本研究では先の和歌集による傾向把握は可能な資料と判断し、調査・解析を行った。これは近世 (江戸時代) 以降になると文献や絵図等の植生景観に関する資料が比較的多くなるのに対し、それ以前の資料が少ないことを補う意味でも意義あるものと考えられる。

歴史的な松林景観については、名勝地である奈良公園興福寺や天橋立公園の松林景観の変遷や景観保全の取り組みに関する研究^{4,10)}、虹の松原の明治期以降の景観価値形成の変遷

*連絡先著者 (Corresponding author) : 〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866 E-mail : osawa.satoshi@nihon-u.ac.jp

表-1 対象となる和歌集の概要と年代区分

Table 1 Outline of the target anthology of Japanese poetry and century division.

和歌集名	下命者	編者	成立年	年代区分
万葉集		大伴家持	759年	700年代
古今和歌集	醍醐天皇	紀友則, 紀貫之, 凡河内躬恒, 壬生忠岑	905年	
後撰和歌集	村上天皇	大中臣能宣, 清原元輔, 源順, 紀時文, 坂上望城	957~959年	900年代
拾遺和歌集	花山院	花山院	1005~1007年	1000年代
後拾遺和歌集	白河天皇	藤原通俊	1087年	
金葉和歌集	白河院	源俊賴	1126年	
詞花和歌集	崇徳院	藤原頼輔	1151年頃	1100年代
千載和歌集	後白河院	藤原俊成	1188年	
新古今和歌集	後鳥羽院	源通具, 藤原有家, 藤原定家, 飛鳥井雅経, 寂蓮	1205年	
新勅撰和歌集	後堀河天皇	藤原定家	1235年	
続後撰和歌集	後嵯峨院	藤原為家	1251年	1200年代
続古今和歌集	後嵯峨院	藤原為家, 藤原基家, 藤原行家, 藤原光俊, 藤原家良	1265年	
続拾遺和歌集	龜山院	二条為氏	1278年	
新後撰和歌集	後宇多院	二条為世	1303年	
玉葉和歌集	伏見院	京極為兼	1312年	
続千載和歌集	後宇多院	二条為世	1320年	
続後拾遺和歌集	後醍醐天皇	二条為藤, 二条為定	1326年	1300年代
風雅集	花園院, 光厳院	光厳院	1349年	
新千載和歌集	後光厳天皇	二条為定	1359年	
新拾遺和歌集	後光厳天皇	二条為明, 頼阿	1364年	
新後拾遺和歌集	後円融天皇	二条為遠, 二条為重	1384年	
新続古今和歌集	後花園天皇	飛鳥井雅世	1439年	1400年代

17,21)等, 個別的な事例地における研究が幾つか見られる他, 瀬戸内の海岸景の紀行文等の記述より古代から近世にかけてその松原景観が賞賛されてきたことを明らかにした研究¹⁴⁾等がある。しかし, 松の植生景観を詠んだ和歌集を基にした研究は, 万葉集のみ²⁾および遠山²⁰⁾が勅撰和歌集に松の名歌が820首あるとする金井紫雲の調査を紹介した以外は見受けられない。一方, 中尾¹²⁾は, ツタが和歌に詠まれる際の植物自体, 他の植物との対比, 場等の観賞の視点の類型を報告しているが, 詠まれた立地や時代変遷には言及していない。

以上より, 本研究は万葉集および勅撰和歌集を基に松の詠まれた立地を把握し, 植生景観に関する資料の少ない奈良時代から室町時代にかけて注目された植生景観が成立し得る立地を検討することにより, 松に対する人々の意識構造の変化過程を考察することを目的とした。

2. 材料ならびに方法

松とはマツ科マツ属の総称であり, 日本に自生する松はアカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. & Zucc.), クロマツ (*P. thunbergii* Parl.), ゴヨウマツ (*P. parviflora* Sieb. & Zucc.), ハイマツ (*P. pumila* (Pall.) Regel) 等の7種¹⁹⁾であるが, 一般的に日本人が「松」という場合はクロマツやアカマツを指す¹⁾。それぞれの生育立地としては, クロマツは潮風に強いことから海岸林に自生または植栽される¹⁹⁾。アカマツは暖温帯から山地帯に広く分布し, 痩せ地や乾燥, 過湿に耐える陽

樹とされる¹⁹⁾。また, 古来より松は防風, 防砂, 防潮林, マツタケ林として, また建築材や燃料用材として実的に活用されてきただけでなく, その象徴性の高さより風景, 庭園植栽, 盆栽, 生け花, 絵画等の美的, 芸術的素材としても積極的に利用・植栽されてきた樹木である。

調査はまず, 万葉集および勅撰和歌集から松が詠まれた歌を全て抽出した(表-1)。これは勅撰和歌集全21集および万葉集をはじめ, 私撰集及び主要な私家集についてテキストデータ化されている国際日本文化研究センターの和歌データベース⁹⁾内より, 「まつ(松)」という語が含まれる歌をすべてキーワード検索により抽出し, リスト化した。また, 歌の中に直接詠み込まれていない場合でも, 題名や詞書, 題詞(和歌や俳句の前書きとして, その作品の動機, 主題, 成立事情等を示したもの)に「まつ(松)」の記述があるものも同様に抽出した。次に, 抽出した歌の原文および現代語訳の確認を「完訳 日本の古典 萬葉集」⁷⁾及び「校註 国歌大系」⁸⁾の「八代集」及び「十三代集」を基に行った。その過程で, 「待つ」といった樹木の松以外の意味合いのみで詠まれた歌は除外した。そして, 歌の内容から松の詠まれた立地が類推できるものを抽出し, その立地を示す用語を表-2に示す分類基準で, 臨海部の「浜」「磯」, 内陸部の「山」「野」, 街や建築物の周りといった「里」, 臨海部と内陸部のどちらか判別できない「江」「浦」等に区分し, 集計した。その際, 直接的に立地を表す用語が歌に無くても, 例えば兵庫県高砂市の海浜を指す「高砂」, 三重県桑名市の海浜を指す「住吉」等, 地名から立地が推察される場合もその区分に組み込んだ。

最後に, 対象の和歌集において松の詠まれた立地の変遷を見るため, 和歌集の編纂された年代を基に700年代, 900年代, 1000年代, 1100年代, 1200年代, 1300年代, 1400年代に区分し(表-1), 各年代区分での松の詠まれた立地の割合について集計した。具体的には, 各和歌集においてマツ類の生育立地が特定できた歌数を母数として, それぞれの立地区分の割合を算出した。1つの年代区分に複数の和歌集が含まれる場合は各和歌集の割合の平均を求め, その年代区分の値とした。解析として, 特徴的な変化が認められた「山」の立地については, 関連用語との関係を詳しく見た。また, 具体的な山名の有無についても歌数割合を求めた。最後に, 「山」の立地との関係が深いと考えられた松の風の音について, 臨海部/内陸部の歌数割合の状況が変化する700年代~900年代, 1000年代~1100年代, 1200年代~1400年代に分けて, 立地別での歌数割合を求めた。

3. 結果

万葉集および21編の勅撰和歌集において, 松は計1,493歌で詠まれていた(表-3)。各和歌集における全歌数に対する松が詠まれていた割合は最大6.06%(新続古今和歌集), 最小1.71%(万葉集), 平均4.04%(N=22)であった。年代別では700年代・900年代でやや割合が低かった(1.7~

表-2 生育立地の特定に用いた用語および地名

Table 2 The terms and place-name using for judgment of habitat types.

大区分	細分	関係する用語・地名
臨海部	浜	浜、御津、白砂、海岸、海人、湊、磯馴松、浜松、松浦潟、沖津、潮干の潟 〈地名〉天橋立、伊勢島、高砂 ^{*1} 、高師、高浜、昆陽、三津、三保、住吉、住江、小松原、大淀、いきの松、いきの松原、みほの浦松、須磨の浦、長門の島、都怒、難波、二見浦、三保の松原、姫島、麻崎、鳴尾、大淀、逢う(粟生 ^{*2})の松原、和歌の浦、和歌の松原
	磯	磯、波打つ岩、かかる岩、(海と一緒に詠まれた)岩 〈地名〉江島、まがきの島、伊良胡が崎、松島、雄島
	その他	小島、浦島、入海、浮島、湊、浪、海、貝 〈地名〉古江の浦、與謝の港、與謝の浦、津の国、松が崎、有明
内陸部	山	山、松山、岡、丘、山里、尾山、尾上、尾、嶺、峰、麓、滝 ^{*3} 、谷、末の松 ^{*4} 、雲居、鷲、炭窯のあたり 〈地名〉萩、藤代、陸奥、大原、(彦根の ^{*2})松原、み吉野
	野	野、原、はつね ^{*5} 、子の日 ^{*5} 〈地名〉春日野、印南野
	水辺	池、河原、川、湖、水際、水辺 〈地名〉阿武、志賀、唐崎、辛崎、千々の松原
臨海/内陸部	松原	(他の生育立地を示す用語の無い)松原
	江	(他の生育立地を示す用語の無い)江、入江
	浦	(他の生育立地を示す用語の無い)浦
岸	岸	(他の生育立地を示す用語の無い)岸
	岩	(他の生育立地を示す用語の無い)岩、巖
里	家、屋戸、宿、ふるさと、庵、社、里、軒、宮崎 ^{*6} 、あさじ原 ^{*7} 、都、院、宮	
	〈地名〉三鈿	

*1:ただし、「高砂の尾上」、「高砂の峰」、「雲居に高砂」の場合は尾上・峰・雲居を優先し、山の生育立地に振り分けた。

*2:現代語訳の注釈より。

*3:「滝」は水辺とも言えるが、山中にあることを鑑み、山の生育立地に振り分けた。

*4:「末の松」は、大津波でも届かない場所をイメージして「ありえないこと」を表現しているため、山の生育立地に振り分けた。

*5:「子(ね)の日」は正月初日の子の日に野に出て小松引きや若菜摘みをして延齢を祈る行事であることから、野の生育立地に振り分けた。

*6:社を指すため、里に振り分けた。

*7:「あさじ原」は荒れた庭の意であり、街・里の生育立地に振り分けた。

2.7 %)が、以降は概ね4~6 %の間で推移した。これら松が詠まれた歌の内、歌の内容からマツ類の生育している立地が特定できたものは1,147歌(松の詠まれた1,493歌の76.8 %)であった。この内、地名のみによる立地の特定は270歌で、先の1,147歌の23.5 %に相当した。各年代での松の詠まれた歌数に対する立地が特定できた歌数割合は、700~1100年代は60~70 %程度に止まり、逆に特定できなかった歌が3~4割を占めていた。しかし以後は順次増加していき、1200年代以降は約80 %以上が立地を特定できる歌であった。また、地名のみにより立地を特定した歌の割合の変遷は、700年代が9.1 %、1100年代が31.1 %とやや変動が見られたが、他の年代は20 %前後で推移していた(表-3)。

立地別の歌数は表-4に示す通りである。まず主にクロマツを詠んだと考えられる「浜」「磯」といった臨海部^{注1}の割合は、期間を通じて22~35 %の間で変動しつつも概ね安定的に詠まれていた(表-5)。これに対し、アカマツを詠んだと考えられる「山」「野」といった内陸部の割合は、年代が下るにつれて増加していた。詳しくみると、臨海部ではどの年代も「磯」の割合は少なく(1~7 %)、常に「浜」の割合が圧倒的に多くなっていた(15~30 %)。一方、内陸部では「野」

表-3 年代別の松の詠まれた歌数と割合

Table 3 Number and percentage of Japanese poetry included pine trees by each century.

年代区分	和歌集名(略名)	歌数(首)	松の詠まれていた歌数と割合	同左平均割合	立地が特定できた歌数と割合	同左平均割合	地名により立地を特定した歌数と割合	同左平均割合
700年代	万葉集	4,516	77(1.71%)	1.71%	45(58.4%)	58.4%	7(9.1%)	9.1%
900年代	古今	1,100	21(1.91%)	2.74%	16(76.2%)	67.5%	7(33.3%)	20.6%
	後撰	1,425	51(3.58%)		30(58.8%)		4(7.8%)	
1000年代	拾遺	1,351	80(5.92%)	5.38%	55(68.8%)	72.5%	22(27.5%)	23.9%
	後拾遺	1,218	59(4.84%)		45(76.3%)		12(20.3%)	
1100年代	金葉	650	37(5.69%)	4.19%	17(45.9%)	71.3%	6(16.2%)	31.1%
	詞花	415	14(3.37%)		12(85.7%)		8(57.1%)	
	千載	1,288	45(3.49%)		37(82.2%)		9(20.0%)	
1200年代	新古今	1,978	90(4.55%)	4.21%	64(71.1%)	79.3%	10(11.1%)	20.2%
	新勅撰	1,374	49(3.57%)		36(73.5%)		9(18.4%)	
	続後撰	1,371	55(4.01%)		47(85.5%)		14(25.5%)	
	続古今	1,915	76(3.97%)		62(81.6%)		19(25.0%)	
	続拾遺	1,459	72(4.93%)		61(84.7%)		15(20.8%)	
1300年代	新後撰	1,607	60(3.73%)	3.92%	54(90.0%)	80.7%	14(23.3%)	17.7%
	玉葉	2,800	136(4.86%)		106(77.9%)		10(7.4%)	
	続千載	2,143	70(3.27%)		61(87.1%)		19(27.1%)	
	続後拾遺	1,353	44(3.25%)		37(84.1%)		8(18.2%)	
	風雅集	2,211	106(4.79%)		90(84.9%)		10(9.4%)	
	新千載	2,365	84(3.55%)		60(71.4%)		13(15.5%)	
	新拾遺	1,920	73(3.80%)		49(67.1%)		17(23.3%)	
1400年代	新後拾遺	1,554	64(4.12%)		53(82.8%)		11(17.2%)	
	新続古今	2,144	130(6.06%)	6.06%	110(84.6%)	84.6%	26(20.0%)	20.0%

(1~14 %)や「水辺」(1~6 %)の割合は常に少なく、先の増加は基本的には「山」の割合の増加と連動していた。

この「浜」と「山」の歌数割合は700年代では「浜」が多く、900年代・1000年代で概ね並び、1100年代で一旦「浜」が多くなるものの、1200年代以降では逆に「山」が多くなっていた。特に1200年代以降では「山」の割合の増加が顕著であり、1400年代では松の詠まれた歌の4割を占めるに至っていた。また、「野」についても900年代までは2 %以下と少なかったが、1000年代以降では5~14 %と割合が増していた。

その他の立地としては、内湾岸(臨海部)とも大河川や湖(内陸部)とも読める「松原」「江」「浦」「岸」、そしてその場所が臨海部か内陸部かは不明な「岩」が認められたが、700年代の「松原」(5.2 %)を除き、全般に割合は低くなっていた。これに対し「里」の割合が期間を通じて一定数(3~11 %)認められていた。

次に「山」の歌数割合の増加について、関連する用語別の歌数とその割合を示したのが表-6である。各年代の合計では山・松山が最も多く(「山」の全歌数の49.8 %)、次いで峰・嶺(18.0 %)、尾・尾山・尾上(10.1 %)の順であった。年代別ではいずれの年代でも山・松山の歌数割合が最も多く、1000年代を除き峰・嶺が次に多くなっていた。時代が下るにつれて岡・丘、末の松等と言った「山」の立地に関する関連用語の種類が増えたこと、一方で山の用語の歌数割合は歌数自体が少ない1100年代以前(7~13歌)に対し、1200年代以降では歌数が増加する中でも50 %前後を占めているのが特筆された。そして春日山、三笠山といった具体的な山名が詠まれている/詠まれていない歌数割合を年代別で比較したところ、700年代では6割以上が山名を伴って詠まれていた

表-4 各和歌集における松の生育立地毎の歌数

Table 4 Number of Japanese poetry for habitat types of pine trees in each anthology of Japanese poetry.

和歌集名 (略名)	臨海部				内陸部				臨海/内陸部						里	合計
	浜	磯	その他	計	山	野	水辺	その他	計	松原	江	浦	岸	岩	計	
万葉集	21	3	1	25	8	1	1		10	4			1		6	45
古今	8	2		10	5				5						1	16
後撰	8		3	11	14	2	1		17					1	1	30
拾遺	20	1	3	24	12	10	3		25					2	2	55
後拾遺	9		2	11	12	9	1		22	1				1	2	45
金葉	6			6	5	2	2		9	1					1	17
詞花	8			8	1	2	1		4							12
千載	7	2	1	10	16	2	3		21				1	2	3	37
新古今	17	2		19	30	5	1		36			1			1	64
新勅撰	4	7	1	12	14	4	1		19			2		1	3	36
続後撰	14	3	2	19	18	1	2		21				1	2	3	47
続古今	11	6	4	21	23	6	3		32		2	2			4	62
続拾遺	17	2	3	22	27	3	4		34			2			2	61
新後撰	9	6	1	16	21	4	3		28					2	2	54
玉葉	12	6	7	25	46	7	3		56	1	1	3	1	1	7	106
続千載	15	4		19	25	3	4		32			1		1	2	61
続後拾遺	9	6		15	11	3	2		16		1	1			2	37
風雅集	10	4	1	15	51	3	7	1	62			2			2	90
新千載	7	3	1	11	21	6	8		35			3			3	60
新拾遺	16			16	20	2	4	1	27							49
新後拾遺	9	2	1	12	32		4		36			2			2	53
新続古今	27	3	4	34	52	7	3		62			2		1	3	110

表-5 年代別の松の生育立地毎の歌数割合

Table 5 Percentage of Japanese poetry for habitat types of pine trees by each century.

年代区分	臨海部				内陸部				臨海/内陸部						里	立地不明
	浜	磯	その他	計	山	野	水辺	その他	計	松原	江	浦	岸	岩	計	
700年代	27.3%	3.9%	1.3%	32.5%	10.4%	1.3%	1.3%	0.0%	13.0%	5.2%	0.0%	0.0%	1.3%	1.3%	7.8%	5.2%
900年代	26.9%	4.8%	2.9%	34.6%	25.6%	2.0%	1.0%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	1.0%	32.5%
1000年代	20.1%	0.6%	3.6%	24.3%	17.7%	13.9%	2.7%	0.0%	34.3%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.1%	2.9%	27.5%
1100年代	29.6%	1.5%	0.7%	31.9%	18.7%	8.0%	6.4%	0.0%	33.2%	0.9%	0.0%	0.0%	0.7%	1.5%	3.1%	28.7%
1200年代	18.1%	6.5%	3.0%	27.7%	32.5%	5.5%	3.3%	0.0%	41.3%	0.0%	0.5%	2.1%	0.4%	1.1%	4.1%	20.7%
1300年代	14.9%	5.5%	1.3%	21.8%	35.0%	4.5%	5.7%	0.3%	45.4%	0.1%	0.4%	1.8%	0.1%	0.7%	3.1%	19.3%
1400年代	20.8%	2.3%	3.1%	26.2%	40.0%	5.4%	2.3%	0.0%	47.7%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	0.8%	2.3%	15.4%

表-6 「山」の立地での年代別の関連用語毎の歌数と割合

Table 6 Number and percentage of Japanese poetry with the terms which indicates a mountain habitat by each century.

用語	700年代	900年代	1000年代	1100年代	1200年代	1300年代	1400年代	合計
山、松山	7 (77.8%)	13 (65.0%)	11 (34.6%)	10 (38.4%)	58 (49.1%)	117 (48.9%)	30 (52.6%)	246
嶺、峰	1 (11.1%)	3 (15.0%)	2 (7.7%)	7 (26.9%)	21 (17.8%)	46 (19.4%)	9 (15.8%)	89
尾、尾山、尾上		2 (10.0%)	6 (23.1%)	2 (7.7%)	10 (8.5%)	23 (9.7%)	7 (12.3%)	50
末の松		1 (5.0%)	4 (15.4%)	3 (11.5%)	11 (9.3%)	13 (5.5%)	5 (8.8%)	37
岡、丘		1 (5.0%)	2 (7.7%)	7 (5.9%)	7 (5.9%)	12 (5.1%)	1 (1.8%)	23
山里			1 (3.8%)		2 (1.7%)	11 (4.6%)	1 (1.8%)	15
麓						5 (2.1%)	1 (1.8%)	6
滝					3 (2.5%)	1 (0.4%)		4
谷				2 (7.7%)	1 (0.8%)	4 (1.7%)	1 (1.8%)	8
雲居						2 (0.8%)	1 (1.8%)	3
鷺						1 (0.4%)		1
炭窯のあたり				1 (3.8%)				1
地名から推察	1 (11.1%)			1 (3.8%)	5 (4.2%)	3 (1.2%)	1 (1.8%)	11

注：1つの歌に2つ以上の関連用語が含まれる場合は、それぞれにカウントした。このため、歌の総数は表-4とは異なる。

表-7 「山」の立地での年代別の山名の有無毎の歌数と割合

Table 7 Number and percentage of Japanese poetry with presence/absence of a mountain name by each century.

	700年代	900年代	1000年代	1100年代	1200年代	1300年代	1400年代
具体的な山名の有る歌	5 (62.5%)	2 (10.5%)	11 (45.8%)	5 (22.7%)	33 (29.5%)	44 (19.4%)	18 (34.6%)
具体的な山名の無い歌	3 (37.5%)	17 (89.5%)	13 (54.2%)	17 (77.3%)	79 (70.5%)	183 (80.6%)	34 (65.4%)

注：図中の数字は、風の音を表した歌数／立地の全歌数を示す。

図-1 立地毎の風（風の音）を表現した歌数割合

Fig.1 Percentage of Japanese poetry included the wind through pine trees for habitat types

のに対し、900年代以降は54~90%と大半が具体的な山名のない「山」の立地で詠まれていた（表-7）。

最後に「松風」「松の風」「松風」等の吹き抜ける風の音を詠んだ歌が多く認められたため、臨海部／内陸部の歌数割合（表-5）において臨海部が多い700年代~900年代、内陸部のほうが多くなる1000年代~1100年代、内陸部の割合が

4割を超す1200年代～1400年代に分けて、立地別で風や音を表した歌数割合の変化を見た(図-1)。その結果、臨海部では、「その他」で1歌ある以外は1100年代までは認められず、1200年代以降も8%以下と低い割合であった。内陸部では、「山」では700～900年代は7%に過ぎなかったが、1000～1100年代では22%に増加し、1200年代以降は25%に達していた。これは、歌数自体の少ない臨海／内陸部を除き、臨海部の「水辺」および「里」「立地不明」でも同様の傾向を示していた。

4. 考察

各時代区分の和歌集における松の詠まれた割合は、実際の植生景観の量的変化によるもの、植生景観に対するまなざし(詠むべき対象の時代的嗜好)の変化によるものが想定される。本研究で対象としたのは和歌であり、後者すなわち各和歌集が編纂された時代の人々が見た風景や心情の中にある風景を詠んだ、その時代の植物やその生育立地を象徴的に示した資料といえる¹³⁾。もちろん、例えば花粉化石等の分析で近畿地方では奈良時代～平安時代中期よりマツ類が増加し始めるという報告¹⁸⁾等より、植生景観の賦存量の変化の影響も皆無ではないが、人の訪れる場所には基本的にはマツ類は生育していたと考えられるため、時代ごとに注目された植生景観という本研究の視点においては直接的な影響はないものと判断した。一方、枕詞等での故人の名所賛美に対する返歌、あるいは例えば庭に植えた松を海辺の松に見立てる等、直接その景観を見ないで詠った歌も多く存在すると考えられる。これらは先述の「心情の中にある風景」に該当するものであり、本研究ではそれも含めて注目された植生景観として捉えることで、その変遷を考察した。

まず各和歌集の平均約4%(N=22)で松が詠まれており(表-3)、必ずしも高い割合ではないが、各年代で常に一定の割合で詠まれていたことが明らかにされた。すなわち、松は700～1400年代にかけて、歌に詠まれる対象となり続けた樹木であることが示された。一方、古い時代(700～1100年代)には詠まれた松の立地が特定できない場合が多く、逆に年代が下るにつれてそれが特定できる割合が高まっていた。すなわち、注目された植生景観としての松は、古い時代には吉兆、不変、長寿等の象徴として、実際の景観から離れて抽象的に詠まれていたのに対し、後にはそれが具体的な土地や景観の中に詠まれるようになったと考えられる。なお、地名のみによる立地を特定した歌数の割合は、大半の年代は20%前後で推移し(表-3)、極端な時代的傾向は認められておらず、これが影響したとは考えにくい。

松の詠まれた立地は主に臨海部と内陸部に大別され、前者の臨海部は年代により変動しつつも概ね一定割合を占めていたのに対し、後者の内陸部は年代が下るにつれて割合が増加したのが特徴的であった(表-5)。そして、最も古い年代(700年代)では松の詠まれた立地が臨海部32.5%に対し内陸部

は13.0%に止まり、さらに臨海部の中でも「磯」に比べて「浜」が圧倒的に多かったことが特筆された。当時、松を詠むのに「浜」の松が最も好まれていたことが読み取れる。万葉集の時代には松原の海岸景に審美的なまなざしを向け、海岸の松には特別の思いを有していたと指摘される¹⁴⁾。これを踏まえると、臨海／内陸部の「松原」(5.2%)は「浜」の立地に含まれる可能性が高い。我が国における本格的な海浜域のクロマツ造林は室町時代後期から江戸時代以降とされ、この積極的なクロマツ造林以前は禁伐等の消極的な海岸林保全がなされてきたとされる^{11,15)}。しかし、室町時代後期(概ね1500年代～)より前となる1400年代まで常に「浜」の松が詠まれ続けてきたことは、海浜域の松林すなわちクロマツ林の自然景にこそ歌に詠む衝動に足る価値が、先の指摘¹⁴⁾の万葉集の時代(700年代)に限らずに置かれ続けてきたことを示すものである。

次に、内陸部の特に「山」の割合が増加した点については、関連用語としてはほとんどの年代で山、峰・嶺が上位を占め、特に山の割合が突出して多くなっていた(表-6)。そして歌数自体の少なかった1100年代以前に対し、1200年代以降は歌数が増加しながらも5割程度が〇〇山や単なる山等の用語とともに松が詠まれていた。また、個々の歌数割合は必ずしも多くはないものの、時代が下るにつれて山に関連する用語の種類が増えたことも影響していると考えられる。ただし、各年代において特定の関連用語の急増は認められず、時代変遷としては全体的に「山」の立地の松が詠まれる歌数割合の増加であった。さらに「山」の立地における具体的な山名の有無の歌数割合(表-7)より、700年代を除き、900年代以降は主に具体的な山名のない、すなわち名所等の著名な名のある山ではなく、ただ目の前にある名もなき山の松を詠む割合が高くなっていた。先の年代が下るにつれて具体的な土地や景観の中に松が詠まれるようになったこと(表-3)も含め、これらの結果を鑑みると「山」の立地、特に名もなき山の松を詠む嗜好が時代を下るにつれて高まった、あるいはそのような立地の松に対する美意識が醸成されてきたと言える。もちろん、この時期の里山林的利用に伴うアカマツ林の賦存量の増加¹⁸⁾の影響も考えられるが、これについては当時の詳細な植生復元の成果を待っての今後の研究課題である。

このような嗜好や美意識醸成における具体的な要素の一つとして、松の間を吹き抜ける風の音を表すために詠まれる歌に着目し、3つの時代区分での風の音を表した歌数割合を見たところ、臨海部での全時代区分における割合の少なさと、内陸部の特に「山」の立地での1000年代以降の割合増加が特筆された(図-1)。ここには「視覚としての浜の松」から、「聴覚としての山の松」への嗜好の変化を読み取ることができ、特に山の松(多くはアカマツ)の間を吹き抜ける風音(聴覚)と結び付けて松を読む嗜好が時代を下るにつれて定着したと言える。

以上より、特に700年代には「山」に対し圧倒的に「浜」

の歌数割合が高く、当時のマツに対する価値の置かれ方は「視覚としての浜の松」が主であった。そして浜のクロマツ林は時代を通じて変わらない高い価値を得ていた。しかし、時代が下るにつれて山のアカマツ林の歌数割合の急増が認められ、特に1200年代を境に割合が逆転したほどに「山の松」への価値の転換が生じていた。そこでは山に関連する用語の種類の多様化や「名もなき山」への嗜好が松の歌として価値を獲得しつつ広まったことが示され、また「聴覚としての山の松」の嗜好もその一助となっていた。なお、当時のアカマツの自然的な生育立地として例えば山地の岩場や崖地等が想定され、このような険しい立地に生育するアカマツを詠んだ歌が無いとは言い切れない^{注2}。その意味では里山林等の二次的自然ではない、自然植生としてのアカマツへの嗜好も元来あった可能性があり、今後の研究課題である。

一方「野」については、これは多くは「子の日」の松として詠まれたものが本研究の分類基準(表-2)に従って「野」とされたためである(「野」の全歌数の54%)。「子の日」は野から若い松を引き抜いてきて庭に植え、長寿を祝うまたは祈るといった儀式的事であり、平安時代の貴族の遊びが起源とされる⁹⁾。すなわち、かつて「子の日」で植えた庭の松を詠んだ歌もここには含まれており、必ずしも「野」の松そのものに新たな価値が付与された訳ではないと考えられる。

最後に「里」で詠まれたものであるが、割合は多くはないものの各年代で詠まれていた(表-5)。庭園にマツ類が植栽されるようになるのは飛鳥時代³⁾あるいは平安時代中期⁵⁾とされる。そして松の景を身近な場所(庭園等)に写し、本歌の情景を偲びつつ歌に詠むことも古くから行われていたことは想像に難くない。ただし本研究では直接観察の有無は問わずに「心情の中にある風景」も含めて詠まれた立地を区分している。すなわち、庭園等の松から想起される山野河海の心の情景を詠む(これは、既にそれぞれの生育立地に振り分けられている)のとは別に、家、屋戸、庵、軒、宮、社等の里の景として松を歌に詠むことも常に行われてきたと言える。

古来人々は、生育立地も含めた植物の生態やその特徴を捉え、心情を託して歌に詠むことで共感を得、豊かな価値観や美意識を醸成してきた。本研究で明らかにした松に対する変わらない価値観、あるいは時代毎による価値観の変化あるいは多様化は、松とその植生景観に対する象徴性、時代性をよく表しており、その文化性の深さを物語っている。このような文化性を踏まえた緑化という視点も今後重要と考えるときともに、個々の緑化植物の持つ歴史的な文化性の掘り起こしについての研究蓄積も求められる。

注1: ただし、クロマツの北限分布より本州太平洋側の宮城県北部以北ではアカマツ主体の海岸林になること、また本州の温暖域でも内湾の波風が弱い海浜域ではアカマツも混じる場合も知られる¹⁵⁾。前者は本州・四国・九州の大半の範囲の海岸マツ林がクロマツ林となること、あるいは後者の場合もその主要構成樹種より、本論では臨海部の歌に詠まれた松は全て

クロマツ林として扱った。

注2: 例えば、峰・嶺・尾山・滝等、アカマツの生態的最適環境を指す植生景観を詠んだ歌が認められている。

引用文献

- 1) 岡利幸 (1993) 松と日本人. 人文書院, 246 pp.
- 2) 服部 保・南山典子・小山靖彦 (2010) 万葉集の植生学的研究. 植生学会誌, 27(2): 45-61.
- 3) 飛田範夫 (2002) 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会, 435 pp.
- 4) 池田武文・深町加津枝・伊藤 武 (2007) 天橋立公園における松並木景観保全の取り組み, 第118回日本森林学会大会講演要旨集: C13.
- 5) 河原武敏 (1999) 平安鎌倉時代の庭園植栽. 信山社, 216 pp.
- 6) 小島憲之・新井栄蔵 (1989) 新日本古典文学大系 5 - 11, 岩波書店
- 7) 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広訳 (1982-1987) 完訳 日本の古典 万葉集, 2-7. 小学館
- 8) 国民図書株式会社 (1931) 校註 国歌大系, 3-8. 国民図書
- 9) 国際日本文化研究センター. “データベース和歌” 国際日本文化研究センターホームページ. <http://db.nichibun.ac.jp/ja/category/waka.html> (参照: 2016年3月3日).
- 10) 前迫ゆり (2005) 世界文化遺産興福寺境内のクロマツ個体群と樹木景観. 奈良佐保短期大学研究紀要, 13: 1-7.
- 11) 村井 宏・石川政幸・遠藤治郎・只木良也編 (1992) 日本の海岸林. ソフトサイエンス社, 513 pp.
- 12) 中尾裕介 (2001) 和歌におけるツタの観賞の視点について. ランドスケープ研究, 64(5): 379-384.
- 13) 七海絵里香・森崎翔太・大澤啓志 (2013) 万葉集および平安期の勅撰和歌集にみる植物に対する行為. 日本緑化工学会誌, 39(1): 74-79.
- 14) 西田正憲 (2001) 瀬戸内海における海岸景の変遷. ランドスケープ研究, 64(5): 479-484.
- 15) 小田隆則 (2003) 海岸林をつくった人々. 北斗出版, 254 pp.
- 16) 太田猛彦 (2012) 森林飽和. NHK 出版, 254 pp.
- 17) 三溝裕之・横内憲久・岡田智秀・宍倉正俊・渡辺太樹 (2004) 海浜空間における景観価値の形成プロセスに関する研究・(その2)「虹の松原」における大正期以降の景観評価要因. 日本建築学会 2004年度大会学術講演梗概集, A-2: 443-444.
- 18) 佐々木尚子・高原 光 (2011) 花粉化石と微粒炭からみた近畿地方のさまざまな里山の歴史. 湯本貴和編, 里と林の環境史, 文一総合出版, 19-35.
- 19) 鈴木和夫・福田健二 (2012) 図説 日本の樹木. 朝倉書店, 26-30.
- 20) 遠山 益 (2013) 松林が命を守る. 第三文明社, 189 pp.
- 21) 渡辺太樹・横内憲久・岡田智秀・宍倉正俊・三溝裕之 (2004) 海浜空間における景観価値の形成プロセスに関する研究・(その1)「虹の松原」における明治期の景観評価要因. 日本建築学会 2004年度大会学術講演梗概集, A-2: 441-442.

(2017年6月20日受理)